



OUIK Newsletter

2020年春号



キノコ狩りを行う国連大学アカデミックプログラム学生@能登町 春蘭の里 (10頁)

目次

地域での活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2ページ

- IMAGINE KANAZAWA 2030 「SDGs カフェ」第6回～10回
- 「SDGs 三井のごつつお Project」第6回～最終回
- シンポジウム「文化で都市をよりサステイナブルにするには」
- 寺社庭園からはじまるグリーンインフラ Vol.1
- 日韓国際会議「世界農業遺産(GIAHS)の保全を通じた SDGs の達成」
- 世界農業遺産国際貢献プログラムとの共同スタディーツアー2019
- 北陸 SDGs ステークホルダーミーティング 2019

国際的な活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11ページ

- IFLA 文化的景観ワーキンググループ国際シンポジウム

新しいスタッフの紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12ページ

インターン生の紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12ページ

読者のみなさまへ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12ページ

IMAGINE KANAZAWA 2030 「SDGs カフェ」

2019年4月に開始した「SDGsカフェ」を引き続き地域の皆さんと協働で開催して来ました。IMAGINE KANAZAWA 2030 プロジェクトの一環として、いろいろな人に2030年の金沢を想像してもらおう（IMAGINEしてもらおう）のが狙いです。前回のニュースレターでは第5回までご紹介したので、今回は第6回から最新回の10回までのダイジェスト版をお届けします。

第6回目は金沢らしいSDGsへの取り組み方を考える上で、欠かすことができない「文化のまちづくり」をテーマに、浦淳氏（認定NPO法人趣都金澤の理事長）を迎えて、金沢らしい文化を使ったまちづくりについて考えました。

金沢には特有の伝統や文化がたくさん残っており、その中には、前田家が投資を行ってきたストックも多く含まれます。全国的に見ても日本海側にはそういったストックが多く残っているはずなのに、「それがうまく生かされていない気がする」と言う浦氏。まずは内発的に市民が地域の文化を見つめ直すことが市民参加型のまちづくりの第一歩だと言います。

SDGsの17のゴールでまちづくりのことをストレートにしているのは、「11.住み続けられるまちづくりを」の1つだけ。「もっとあっていいと思う。そもそもデベロップメントとサステナビリティを一緒にするのが難しい」と言う浦氏からは、「その地域ならではの文化にもっと寄せてみるのもいいのでは？」との意見が出ました。



2020年には日本海側初の国立美術館となる国立工芸館の石川金沢への移転や、「国際工芸サミット」の開催予定もあり、北陸と金沢の工芸は今、大変注目を浴びる状況にあるそうです。「小松や金沢などの工芸は内発的に持続可能な形でやっていける可能性がある。工芸館が

くることで、日本を見渡した工芸拠点を作れたらいいと思う。そして金沢はぜひ、北陸の中心として工芸のマーケットを作っていきたい」と、期待を述べました。

第7回目のテーマは「気候変動危機、金沢のアクションをみんなで考える」というとても関心の高いテーマでした。

奥圭奈子氏（地球の未来をリデザインする会代表）から、2030年の金沢をイメージしてもらい、河内幾帆氏（金沢大学）による話題提供と、後半は青海万里子氏（金沢エコライフくらぶ代表）も加わり、気候変動に対して、「市民一人ひとりは何ができるのか？」を話し合いました。

金沢でご主人と一緒に宿泊施設を運営し、2児の母でもある奥氏は気候変動に対する海外の学生のムーブメントなどを見聞きするうちに「自分も何かしないといけない」と思うようになり、同じ思いを持つ地域の人たちとつながり、地球の未来をリデザインする会を立ち上げたそうです。



金沢大学で環境問題を教える河内氏は元アメリカ副大統領 アル・ゴア氏が東京で開催した、気候変動問題について学ぶトレーニングプログラム「Climate Reality Leadership Corps Training」に参加したばかりということで、そこで学んだ気候変動の今を、ゴア氏の心揺さぶられるメッセージとともに、会場と共有しました。さらに化石燃料使用が温室効果ガスの一番大きな発生源となっている事など、気候変動の現状についてデータを見ながらおさらいし、今後どのような解決策を講じるべきなのか教えていただきました。未来の子供達のために手遅れになる前に「いま私たちができること」から行動を起こすべき、と語りました。

河内氏の話を受けて、青海氏には「一人ひとりやるだけでなく、大きなチームで取り組まないと



いけないこと。いろんな動きが一つにつながっていくためにどうしたらいいのか？ 皆さんからお知恵をいただきたいです」と語り、「地域でなにができるのか？」について会場と一体となって議論していただきました。

ファシリテーターを務めた永井（OUIK 事務局長）は「使うエネルギーを再生可能エネルギーに変えることがいちばんの手段ではないでしょうか。10年後に、『なんで何もしてくれなかったの？』と言われるより、『実はSDGs カフェというすごいカフェがあって、そこから始まったらしい』って言われたいですよね。そのためには地域の温室効果ガスの排出量をモニタリングして、みんなで下げていく必要があるのではないのでしょうか？」と述べました。

第8回目のテーマは「つながり、助け合うのに必要なことは？～パートナーシップの新しい形を考える～」とし、広石拓司氏（株式会社エンパブリック代表取締役）からアイデアをいただきながら、「金沢ミライシナリオ（金沢 SDGs 行動計画）」を策定している笠間彩氏（金沢市企画調整課）が2030年の金沢をイメージしました。



SDGs のゴールはどれもとても幅広く、誰か一人の力で解決できるものではありません。そこで必要となるのがパートナーシップであり、「それだけ重要だからこそ、17番目のゴールに位置づけられている」と、OUIK 事務局長の永井が SDGs 達成におけるパートナーシップの重要性について語り、カフェがスタートしました。

金沢市と金沢青年会議所（JC 金沢）、国連大学 OUIK とが、2019年3月に IMAGINE KANAZAWA 2030 を立ち上げ、2020年からの行動計画を市民と一緒に、まさしくパートナーシップで考えるプロセスが進行しています。笠間氏は「自分たちが作った目標、自分たちが作った行動計画、さらにはその行動がちゃんとできているかのチェックまで、すべてを自分事として考えることができる、“金沢 SDGs は自分たちのもの”と思えるプロセスをとっていきたい」と強調し、「2030年には、何か問題を解決したいという時に、皆さんが自然と力を合わせ

られるようなまちに金沢がなっている事が私の一番の望みというか、夢です」と語りました。

引き続き、パートナーシップの様々な取り組みをされている広石氏からの話題提供がありました。「果たして問題のない状況というのはどの



ようなものなのでしょうか？そして、一つひとつ問題を潰していくというアプローチで本当にいいのでしょうか？一つひとつ問題を潰すより、いっそのこと、皆が幸せな世界を作っちゃった方が早いし、トータルコストが安く済むのでは？」と語る広石氏。パリの都市農園の話やサンフランシスコの水筒リフィル設備の話为例に、一つの取り組みが多面的な問題の解決策になり得る、そして様々な考えを持つ人が協働することで社会システム全体が変わる可能性がある、という点についてお話いただきました。単独では難しいことでも、大切なのは協力すること、つまりはパートナーシップが重要で、実際起きている問題を分かち合い、一緒に取り組んでいこうという人が増えることが理想と語りました。「社会を変えると

いう事。このカフェはそういったチャレンジをしていける素敵な場だと思っています」と広石氏は話を結びました。



第9回目はテーマを「2030年の金沢の交通を考える」とし、「2030年の金沢の交通はどうなっていて欲しいか？」ということ、人々の幸せや魅力のあるまちづくりとリンクさせて、市民目線から議論をしました。アイデア提供は「トランジション・マネジメント（transition management）」の第一人者で、オランダから来日していた Derk Loorbach 氏（エラスムス大学教授・オランダトランジション研究所所長）、イメージしてくださったのは金沢レンタサイクル「まちのり」の仕掛け人でその事務局の片岸将広氏（株式会社日本海コンサルタント）です。

トランジションとは？

「推移、変遷、移行、過渡期」という意味で、持続可能な未来社会を目指すのであれば、ステークホルダー間の草の根の合意形成ではなく、構造的転換までをも見据えた問題解決の方法論を検討する必要があるとする考え方です。

片岸氏は3年前スペインのバルセロナを旅行した時に、現地の様々な交通事業者に話を聞き、市民が利用するモビリティ（公共交通）につ



いて調査をしたそうです。ヒアリングの時の質問の1つが「なぜモビリティが必要か？」だったそうですが、帰ってきた答えは「Happiness（ハピネス）/人々の幸せのため」、「人々の活動を支え、幸せな都市生活を演出するというのがわれわれの使命。そのためにモビリティサービスを提供します」だったそうです。片岸氏はこの「ハピネス」をキーワードに、「人々が幸せへとアクセスするための手段としてのモビリティ（公共交通）」を実現させたいと語ります。そのためには市民、企業、自治体、商業社など様々なステークホルダーの中で「ハピネス」のような共通のビジョンが共有できていることが重要になってくるそうです。

次に未来のハピネスのためにモビリティを再構築、そしてトランジションしていく方法について、研究のみならず実践にも関わっているという Derk 氏からアイデアを提供していただきました。



「例えば、気候変動や生物多様性の喪失という問題は世界的に認識されているが、実際にはアクションが起きていないという問題があります。

人々はそれを認識していて、解決策まで知っていてもです。そこに大きな変化を起こすにはどうしたらいいか？ 私たちはそこに焦点を当てています」と Derk 氏と言います。トランジションの研究というのは、「なぜ変わらないのか？ そしてどういう風に変わっていけるのか？」ということを経験時には批判的思考を用いて考えることが必要だそうです。「私がトランジションの話をする時、理想主義者とかドリーマーだとか言われて、無理だとか、お金がかかるとか、否定的な態度をとる人がいますが、そういうことはありません。未来を信じることは簡単ではありませんが、変化や未来を信じる人を増やすことは、トランジションのプロセスの一部です」と Derk 氏は語ります。その人たちがうまく仲間を作り、いろいろな実験や方法を試していくことで移行が始まります。それが大きくなってくると形が見えてきて、例えば金沢ではここ数年で自転車用のレーンがかなり増えてきました。それと同じように、将来的には当たり前だと思っ

ていまだ当たり前ではないことが、少しずつ当たり前になっていくのかもしれませんが。

最後の質問タイムでは金沢の観光やオランダの自転車事情などたくさんの情報交換が行われました。



第10回目のテーマは「『スポーツ×SDGs』から考える金沢の可能性」とし、灰田さち氏（ツエーゲン金沢事業企画部次長兼ホームタウン推進室室長）にツエーゲン金沢の活動と2030年の姿をイメージしてもらいました。アイデア提供にはブラジルへサッカー留学の経験もあるという高木超氏（OUIK 研究員・慶應義塾大学大学院特任助教）に参加していただきました。

「ツエーゲン金沢」は、金沢市をはじめ石川県全県をホームタウンとするプロサッカークラブ（J2）です。「挑戦を、このまちの伝統に」



をクラブ理念として掲げており、その背景には「金沢には伝統という言葉がつくものが多い中、挑戦する、チャレンジする姿勢を皆さんに示すことで、挑戦というものを石川県の新たな伝統の一つにしていきたい」という思いがあるそうです。さらに地域の人々から愛されるクラブとなるべく、サッカー教室をはじめ、たくさんのホームタウン活動を行っているそうです。「2030年までに、石川県民の誇り、シンボルのような存在になりたい」と考えているそうで、「地域の皆さんと一緒に石川県、金沢を活力のあるまちにしていきたい」という灰田氏。

「皆さんと共に石川県をより活力を感じられるまちにしていく、そのためにSDGsに合致するような活動だったり、社会連携活動をもっと展開していきたいと思っています」と締め括りました。



次に高木氏の方から SDGs や環境問題、社会問題解決に取り組んでいる国内外のサッカーチームの活動例を紹介していただき

ました。例えばイギリスの「フォレストグリーン・ローヴァーズ FC」は世界で一番環境にやさしいクラブとして国連からも認定されており、スタジアムにソーラーパネルをつけ、スタジアムの電気を全て太陽光発電で賄うという取り組みをしているそうです。一方、Jリーグの「川崎フロンターレ」ではサッカーの得点を計算できる算数ドリルを配り、SDGs のゴールでは 4 番「質の高い教育をみんなに」にも貢献しています。さらに高木氏は「例えば、『18. 豊かなスポーツ文化の醸成』とか作り、金沢の文化を大事にしながら、SDGs を楽しく、うまく活用していただければと思います」と、金沢らしさを生かせる SDGs のあり方を提案しました。



最後のグループディスカッションでは「スポーツ用品に伝統工芸を取り入れる」や「食品ロスの削減につなげて給食にスポーツ選手とかが出向き、一緒に食べ切る、または栄養バランスを考えながらみんなで楽しく食べるということを体験させる」など、たくさんのアイデアが出ました。

「SDGs 三井のごつつお Project」第 6 回～最終回

OUIK では「世界農業遺産 (GIAHS) 能登の里山里海」を利用した持続可能な未来へ向けての教育活動をサポートしています。2019 年 5 月には石川県輪島市において地域教育活動などを行う、まるやま組が三井小学校と協力し、『SDGs 三井のごつつお Project』という環境教育プロジェクトを立ち上げました。1 年にわたり、絵本「ごつつおをつくろう」をベースに「ごつつお (ご馳走)」をつくる過程から地域の自然や伝統、それらのつ

ながりを学ぶことを目的に活動して来ました。教室を飛び出し、地域の人たちのお話を聞いたり、友達と協力して「ごつつお」を作ったりと、自分の頭で考え、実際にやってみるという過程を通し、クリエイティブな思考や地域を誇りに思う気持ち、そして里山の自然に感謝する心が育まれています。このニュースレターでは前回からの続き、第 6 回～最終回までのダイジェスト版をご紹介します。

10 月に行われた第 6 回目は栗拾いに昆虫観察など、秋の里山を満喫できる企画でした。この辺りではもともと地域の人



が栗の木を薪にしたり、炭にしたりして生活の中で活用していたこともあり、栗の木がたくさんあります。今回はシバグリという野生の栗を採り、「搗栗 (かちぐり)」という栗を茹でて乾燥させた「ごつつお」を作りました。

栗を茹でている間を利用して子供たちは蛇について写真や抜け殻を観察しながら学びました。秋の里山には繁殖期を迎え神経質になっているマムシがよく出るそうで、注意が必要だそうです。蛇は種類によって体の鱗 (うろこ) の列数が決まっており、お腹の太いところの鱗を一周数えることで、何の種類のへびなのか抜け殻からでもわかるそうです。普段なかなか見ることのないへびの抜け殻に興味津々の生徒たちです。



その後、田んぼの畔に植えてある小豆を観察したり、水辺で昆虫を観察したり、子供たちは秋の里山の多様性を肌で感じ、様々な生き物との関わり方についても学べたのではないのでしょうか。珍しいゲンゴロウも発見できて思い出に残る時間となりました。

11 月に行われた第 7 回目は「まとめの回」として世界の食に関する問題を学んだり、いろいろな国の食を味わ

ったり、春にみんなで作ったワラビの塩漬けの塩抜き作業をする回になりました。

はじめに「今、世界が直面している食に関する問題」について SDGs の視点で OUIK の富田から紹介がありました。「飢餓問題」についても国連 WFP のハンガーマップを見ながら考えてみました。「アフリカが深刻」「日本は全然大丈夫だね」と生徒たちは自分たちのテーブルに置かれた地球儀を使いながら場所を確認していました。気候変動や先進国の経済活動が飢餓問題の要因となっていることもあり、先進国に住む私たちが真剣に向き合うべき問題だということの子供たちも理解したようです。



次に「地球の食卓—世界24か国の家族のごはん」（著者=ピーター・メンツェル+フェイス・ダルージオ）を使い、世界の食卓を覗いてみました。掲載されている、様々な国や地域の「ひと家族における1週間分の食料」の写真を見ながら、気づいたことを発表しました。「パンがたくさんある、パンが主食かな?」「野菜が多いけど肉が全然ない」「家族が多い! 来ている服も全然日本と違う」など、たくさんの発見がありました。国や地域によって食料の種類や量、家族の雰囲気は様々で、見たことのない食材も沢山あったようです。

次に萩野由紀氏（まるやま組 主宰）から5月にみんなで作った「ワラビの塩漬け」の塩抜きについて教えてもらいました。山菜を茹でたり、塩抜きをするときは銅鍋を使うのが昔から伝わる知恵だそうで、銅鍋を使うと銅イオンが葉緑素（クロロフィル）とくっつき、食材の変色を防げるそうです。



最後は「能登空港発 世界一周ごつつおツアー」とし、鈴木氏（まるやま組）のブルキナファソ料理「トー」、OUIK インターン生フェリックスのスイスの「ロシュテ

ィ（Rösti）」OUIK 富田のイギリス/オーストラリア料理「ベジマイト」を食べるツアーを行いました。住んでいる地域や環境、文化が違つとそこで食べられているものも多種多様です。最後に萩野氏は「今いろいろな地域の料理がどこにいても食べられる時代となりましたが、自分たちが育つた地域の「ごつつお」の味を忘れないでほしい」と話しました。



最終回となった第8回目は奥能登に古くから伝わるアエノコトと呼ばれるお祭りに参加しました。一年のお米の収穫を感謝して、毎年12月5日に田の神様を家にお招きしお風呂やご馳走でおもてなしし、春まで休んでいただきます。翌年2月9日には同じようにおもてなしをして豊作を祈願して田んぼへ送り出す行事もあります。この一年間、子供たちは「SDGs 三井のごつつおプロジェクト」でご馳走の材料集めをしてきたので、4,5,6年生12名が参加して一緒にお供えさせていただきました。



お祭りの儀式が始まると、まず田んぼから神様を連れて来て「田の神様がおかえりやぞ! お迎えせーよ!」と家のものに声をかけ、囲炉裏のそばに通します。暖かい甘酒を差し上げたらお風呂にも案内し、ゆっくりくつろいでいただきます。次はご馳走です。座敷には田の神様ご夫婦二人分の御膳が設えられています。二股の大根、御膳には一升枅にあふれんばかりの赤飯、煮しめにはわらび、ゼンマイ、大根、人参、こんにゃく、油揚げ。あいまぜという青大豆の打ち豆と大根や人参を炒り付けたおかずもあります。冷蔵庫もなく肉や魚が今のように手に入らなかった昔、打ち豆は貴重なタンパク源でした。そして立派な尾頭付きの鯛、大きなおはぎ。お汁に漬物。

「稲作は力仕事で大変なのでたくさん食べてください」という意味が込められているそうです。



6年生5人が代表してご挨拶をしました。「田の神様、これは5月にまるやまで集めたわらびの塩漬けでございます。これは7月に珠洲で作ったあごだしでございます。田の神様、これは10月にまるやまで拾って干した勝栗でございます」そしてみんなで「どうもありがとうございました！」とお礼を言って、最後に権現太鼓の演奏を披露しました。田の神様も今年はきっと三井小学校の子供達の用意したご馳走を喜んで召し上がったことでしょう。

自然の恵みを得る喜び、そこから自分の手で作る楽しさ、それを選ぶ選択肢が三井のような里山にはたくさん残っています。小学生のような感受性豊かな時期に五感で、地域の自然や土地に根ざした知恵に触れることができるように大人たちが環境を整えることが大切です。



シンポジウム「文化で都市をより持続可能なにするには」

日時：2019/10/16

場所：金沢市文化ホール

ユネスコ創造都市ネットワークは、文化の資源あるいはクリエイティビティというもので都市を元気にして行くことを目指している世界の都市の集まりです。工芸、音楽、メディアアートなど、世界の180以上の都市が参加するネットワークです。金沢市は2009年に工芸分野で認定され、今回その10周年を記念して金沢市は「ユネスコ創造都市ネットワーククラフト&フォークアート分

野別会議 2019」を主催しました。このシンポジウムはその関連イベントとして、国連大学 OUIK が開催しました。

はじめに国連大学 OUIK 所長の渡辺綱男よりこの10年を振り返り、このシンポジウムのテーマ、「文化で都市をより持続可能なにするには」の可能性を、「会場の皆さんと一緒に考えていきたいです」と、開会の挨拶を行いました。



続けて、「音楽創造都市ゲントが奏でるSDGsの声」と題し、ベルナルド・カトリッセ氏（公益財団法人アーツフランダース・ジャパン館長）による文化

を活かしたSDGsの取り組みについての基調講演が行われました。金沢と姉妹都市でもあるベルギーのゲント市は、金沢市と同じく2009年に音楽分野でユネスコ創造都市ネットワークに加盟しています。「ポケットサイズの大都市」と称され、小さいながら古くから発展してきたゲント市では、「人々が住んで働きたいと思う市、そして将来世代が幸せな生活を送れる都市」を目指し、SDGsの実行、達成に注力しています。カトリッセ氏からはゲント市の活動例をたくさん紹介していただきました。「ゲント・アン・ガルデ」という、持続可能な食品の生産や消費を行っていくプロジェクトや、「プラスチックなし月間」、さらにSDGsの推進を近隣のまちと競い合うキャンペーンなど、課題解決の中に文化活動が結び付けられているものが多くみられます。カトリッセ氏は「文化は人々をつなげると申しましたが、特に音楽は万国共通の言葉であり、言葉の壁も文化や背景の違いも超越して人々をつなげることができます。そしてSDGsを政策の中に取り込んでいくことは、将来の人たちが温かい街で生きていくために、すべての人が安心して生活していける場所を作るために、必須です。」と締め括りました。



次にパネルディスカッションが行われました。テーマは「暮らしと工芸とSDGsを創造的につなぐ」とし、モ

デレーターは国連大学 OUIK 事務局長の永井三岐子が務めました。

はじめに安江雪菜氏（ユニバーサルデザインいしかわ専務理事）が、「包摂性を高めるクラフトアートの役割」と題し、「ユニバーサルデザイン茶会」や「ダイアログ・イン・ザ・ダーク」の例と共に金沢での活動や影響について発表しました。

続いて、ウォラン・ブンヤスラット氏（チェンマイ大学社会研究所長）からは、工芸、フォークアートにおける持続可能性について、チェンマイの事例を紹介しました。



チェンマイでは「アートと文化の素晴らしい都市」を目指し、街の独自性と多様性を重視しつつ、イベントを企画し、市の行動計画を立てているそうです。「創造都市ネットワークを強化し、次の世代にそれを伝えることは、我々の町にとっても非常に重要」だと強調しました。



最後は、OUIK のファン・パストール・イヴァールス研究員から「SDGs のプラットフォームを育む日本庭園。日本庭園を使っていかにか SDGs の目標を達成するか」について、発表

表がありました。日本庭園は、人とクラフトと自然の3つを結びつける存在だと言います。例えば漆職人がアトリエにしたり、加賀染職人が糊を洗い落とすのに庭の用水を使ったり、香道や煎茶道の活動の場に用いたり、様々な工芸や文化と直接結びついているものも少なくありません。「庭園というのは人と自然をつなぐもの。庭園を保存することで人と自然のつながりも維持できます。」とファン研究員は述べました。

3人の発表を受けて、会場も交えたディスカッションも行われました。チェンマイでの取り組みに関する質問や実践的に参考となる話、ネットワークで協働し、共通の価値観を持つことの重要性などについて議論されました。

寺社庭園からはじまるグリーンインフラ Vol.1

日時：2019/10/22

場所：心蓮社庭園

恒例となっている清掃活動にワークショップを組み合わせた「寺社庭園からはじまるグリーンインフラ Vol. 1」

が心蓮社庭園で行われました。今回は丸谷耕太氏（金沢大学）そして坂村圭氏（北陸先端科学技術大学院大学）のゼミとの合同企画です。さらに特別ゲストとして林珠乃氏（龍谷大学）をお招きし、基調講演も行っていただきました。

はじめに OUIK のファン研究員より、この庭園清掃ワークショップの活動についての説明がありました。金沢市に多く残されている庭園のほとんどが維持管理に関する問題を抱えており、このようなワークショップは新しい庭園管理のシステムとして大変重宝されているそうです。これまでに約 340 名の方がこのワークショップに参加しており、徐々に市民の生活にも溶け込んできました。ファン研究員は清掃を始める前と後に参加者にアンケートを行っています。その結果、庭園を清掃することでポジティブな感情が増し、ネガティブな感情が減ることがわかりました。このような清掃活動は庭園の持ち主だけでなく、参加者にもプラスに働くことがわかります。

次は滋賀県の龍谷大学からお越しいただいた林氏に「過去の文化的景観を可視化する」をテーマにお話しいただきました。金沢の日本庭園の



文化的景観や生物の多様性がミクロな視点だとすると、今回の林先生のお話はもう少しスケールが大きいもので滋賀県の琵琶湖の周辺一帯が示された地図を使いながらマクロな視点で人と自然の関係を見ていきました。日本の自然は「セカンダリーネイチャー」と呼ばれる、人が意図的に手を加えて維持管理してきた自然がほとんどを占めます。そのため、人々の生活スタイルや社会の変化により過去から現在に至るまで変化し続けてきたそうです。林先生の研究では過去の自然環境や文化的景観にも着目し、土地の利用方法や自然環境の変化を調査しています。「昔から現代に至るまで変わらずに存在する自然の利用方法を調べることで持続可能な人と自然のつながり方や、その土地の環境に合った産業などを示唆できるのではないか」と述べました。

次は清掃活動です。3つのグループに分かれ、主に秋になり増えてきた落葉を集める作業を行いました。今回は偶然、庭師の中見幸氏も参加していたこともあり、苔の手入れ方法など普段なかなか教わることでできないブコの技術や知恵も教えていただきました。十数人で清掃し1時間ほどかけてやっと綺麗になりました。この作業を所有者や管理人が一人で行うのはとても厳しいことだと、参加者も身をもって感じたようです。



清掃後は恒例のアンケートを行い、その後ディスカッションセッションも行い、今後の活動や庭園の活用法についてたくさんの意見がでました。庭園で自然に囲まれて過ごす時間は都市で暮らす人々にとってとても貴重な自然と触れ合う場であると共に共通の目的を持ちながらコミュニケーションを図り、人との関係を深める場でもあります。美しい庭園で楽しみながら学び、参加者の皆さんはとても満足したようです。

日韓国際会議「世界農業遺産(GIAHS)の保全を通じたSDGsの達成」

日時：2019/10/30

場所：金沢市文化ホール

国連大学サステナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) では、韓国農村振興庁国立農業科学院 (RDA) と 2018 年 1 月から 3 年間にわたり、FAO が認定する世界農業遺産 (GIAHS) と各国が認定する国内農業遺産についての比較研究プロジェクトを実施してきた背景があります。本国際会議では GIAHS が各認定地に与えた影響と未来へ残した課題を SDGs というグローバルゴールから考え、GIAHS と SDGs の関係性を日本、韓国からの専門家による解説によってひもときました。

韓国からは黄大龍氏 (韓国農村振興庁 (RDA) 農業研究士)、鄭明哲氏 (韓国農村振興庁 (RDA) 農業研究士)、金正坤氏 (河東郡河東茶生産者協議会事務局長)、劉鶴烈氏 (忠南研究院研究委員)、李暎植氏 (韓国農漁村遺産学会副会長) が参加し、韓国内での GIAHS や NIAHS の活動状況を報告して頂きました。さらに河東伝統茶農業の多面的機能と活用について、そして錦山伝統高麗人参農業システムの持続可能性などについてもご紹介いただきました。

日本からは齊藤修氏 (UNU-IAS アカデミックプログラムディレクター)、大和田順子氏 (世界農業遺産等専門家会議委員)、金田直之氏 (珠洲市役所企画財政課課長)、青田朋恵氏 (滋賀県農政水産部農政課主席参事) が参加し、能登地域における社会・生態システムの統合化による自然資本・生態系サービスの予測評価や、珠洲市の SDGs とアートと GIAHS を結びつけた活動、さらに

は現在 GIAHS に申請中の琵琶湖のシステムについての紹介がありました。

パネルディスカッションでは「GIAHS の地域振興と SDGs などの国際的な目標達成への貢献」についてイヴォーン・ユー



氏 (UNU-IAS 研究員) がモデレーターを務め行いました。李氏は「韓国では SDGs はいまだに中央政府、地方政府による取り組みであり、市町村レベルで目標を掲げている珠洲市などの取り組みに感銘を受けた。韓国では今後 GIAHS アクションプランに対するモニタリング指標を SDGs に結び付けることが出来れば」と述べました。さらに GIAHS の認知度の低さは日本と韓国の GIAHS が持つ共通課題の一つであり、青田氏からは「SDGs が企業や市民社会に広がってきている。GIAHS の認知度を高めていくにあたり、SDGs を活用できるのではないかと考えている。」との意見が出ました。

最後に中村浩二氏 (金沢大学名誉教授・東アジア農業遺産学会 (ERAHS) 日本議長) より総括コメントを頂きました。GIAHS は認定されてからが大変であり、モニタリング→アクションプランの改訂→GIAHS のアップグレードを地域全体で取り組まなくてはならない。そのために今一番重要なことは人材育成であると述べ、中村氏が長年取り組んできたフィリピン・イフガオのマイスタープログラムについてもご紹介頂きました。

閉会の挨拶は寺崎信二氏 (石川県農林水産部里山振興室長) より頂きました。韓国農村振興庁 (RDA) や参加者の皆さまにお礼を申し上げると共に、今後に向けての意気込みを語り、4 時間にわたる日韓国際会議は閉幕となりました。



世界農業遺産国際貢献プログラムとの共同スタディー ツアー2019

日時：2019/11/9-11

場所：能登地域



第2回目となるいしかわ世界農業遺産国際貢献プログラムとの共同スタディーツアーが開催されました。このプログラムは石川県が主に開発途上国を対象に、世界農業遺産認定の支援や、地域振興に向けた能力開発研修を実施することで、持続可能な発展に貢献するプログラムです。第1回目の去年と同様に石川県、国連大学サステナビリティ高等研究所（UNU-IAS）学術プログラム、国連大学いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット（OUIK）が能登地域をフィールドに共同企画・開催し、国連大学、金沢大学、名古屋大学、東北大学、東京農業大学の留学生からなる世界13か国総勢17名が3日間にわたり能登地方を訪問し、里山里海を活用した地域振興の取り組みを学びました。

1日目は輪島市にて土地に根ざしたくらしをテーマに様々な活動を行う「まるやま組」や、「いしかわ農業ボランティア」の現場、さらに



「穴水町の牡蠣の養殖場」を訪問し、移住してきた方のお話を聞いたり、地域の方々の様々な協働活動を視察しました。

2日目は能登町の利用価値の少ない木材を地域通貨と交換できるプロジェクト「木の駅プロジェクト」について学び、実際に木の駅も訪問しました。次は里山のリアルな暮らしが体験できる農家民泊施設が集まる「春蘭の里」を訪問し、多田氏（春蘭の里事務局長）の案内で里山でキノコ採りも行いました。午後は輪島市に戻り、昔ながらの方法で和紙を作っている「仁行和紙」を訪問し

ました。ここでは近隣の里山で採取した材料を使い、学生の皆さんも紙漉を体験しました。



最終日の3日目の朝は輪島の朝市を見学しました。その後、能登空港の会議室で伊藤浩二氏（金沢大学能登学舎特任准教授）より、能登里山里海 SDGs マイスタープログラムについての講義を受けました。このプログラムは少子高齢化が進む能登地域にて里山里海の自然資源を活かし、能登の明日を担う「若手人材」を育てる人材開発プログラムです。修了生と連携し講義プログラムを組むため研究内容も様々で幅広い分野の知識を学べます。

午後は学生たちの最終発表とディスカッションセッションが行われました。このアカデミックプログラムはUNU - IAS の Trans-disciplinary and Graduate Research Seminar(TGRS)という共同演習の1コマとして実施しているもので学生たちは「高齢化と人口減少」をメインテーマに掲げ、「教育」「持続可能な生業」「ツーリズム」といった3つのサブテーマに分かれ、3か月前から事前研究を行ってきました。

今回の発表では事前研究の内容に過去3日間で得られた能登里山地域に関する洞察と課題に対応するための戦略やアイデアを付け加えて発表しました。交流人口を増やすためのアイデアや留学生や学生に能登で活動してもらうための大学との共同プログラム、更にエコツーリズムに関するプロモーション戦略など、たくさんの意見が出ました。地元との関係者の方々にもディスカッションに参加して頂き、3時間にわたり活発に意見交換を行いました。今後はこれらのアイデアを具体的に形にしていくなために学生たちは研究を続けていく予定です。



北陸 SDGs ステークホルダーミーティング 2019

日時：2019/12/17

場所：金沢歌劇座

この会議は 2019 年 9 月 6 日、国連大学本部にて開催された「『SDGs 実施指針』改定に向けたステークホルダー会議」（主催：SDGs 推進円卓会議有志、国連大学サステナビリティ高等研究所）の地方版として開催され、北陸各地から企業、地方自治体、市民団体など様々な立場の SDGs に関わる人々が参加し、北陸のありたい未来を議論し、次世代に向けて SDGs で描く未来を発表しました。

初めに主催挨拶として竹本和彦（国連大学サステナビリティ高等研究所上級客員教授）より挨拶があり、SDGs の実施指針が本年末に改訂されるタイミングでこのような会議が地方で開催されることの重要性について語られました。



次に内閣府地方創生推進事務局参事官の遠藤健太郎氏から来賓の挨拶を頂戴頂くと共に国の政策、地方創生と SDGs についてご説明頂きました。



さらに金沢工業大学 SDGs 推進センター長の平本督太郎准教授からは情報共有として、この会議の狙いや分科会の進め方についての説明がありました。



今回のミーティングでは以下、5つの分科会に分かれ、それぞれのグループ内で 2030 年の北陸の姿について具体案をシナリオ形式で制作しました。

- ① 誰もが暮らしやすいまちとは
- ② イノベーション：地域での創造と、世界への発信
- ③ 教育：人生 100 年時代のキャリアと学びとは
- ④ パートナーシップ：みんなの力を地域で結集するしくみ

⑤ 多様性：多様な人々が意思決定に参加できる社会とは

分科会では最初に NRI 未来年表 2020-2100 や総務省「未来をつかむ TECH 戦略」などの資料に目を通し、未来像を抽出しながら 2045 年の働き方とライフスタイルについてありたい姿を描きました。更に今回のイベントではペルソナ（人格）を設定し、その人が生きる人生のストーリーやターニングポイントを具体的な内容で次世代へのシナリオを参加者が制作しました。午後の分科会の後にはそれらのシナリオを学校帰りに参加してくれた学生や生徒の皆さんに報告し、評価してもらいました。テクノロジーの進歩で可能になるシステムや家族の在り方の変化などたくさんのアイデアが共有されました。



最後に渡辺綱男（OUIK 所長）が、北陸地方における今後の SDGs 推進への期待を込め、閉会の挨拶を行いました。さらに参加者の皆さん、そして最後

の共有セッションに参加して頂いた学生の皆さんに感謝の言葉を述べました。

IFLA 文化的景観ワーキンググループ国際シンポジウム

日時：2019/11/16-20

場所：韓国・ソウル

韓国・ソウルで開催された IFLA（国際造園家連盟）の「文化的景観ワーキンググループ国際シンポジウム」に OUIK のファン研究員が参加しました。ソウル



大学が主催したこのシンポジウムのテーマは「歴史的文化的景観の継承、耐久、そして持続可能性」です。

ファン研究員は「金沢市の長町や日本庭園等の歴史的文化的景観の持続可能な保全」について発表し、世界各国から参加した研究者と意見交換を行いました。

最終日には世界遺産の候補としても有名な霊山や庭園を含む、新羅王朝時代の文化的、歴史的な遺産を訪問しました。



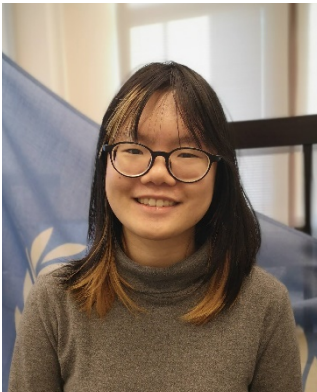
新しいスタッフの紹介



小山 明子
リサーチ・アソシエイト

英国インペリアル・カレッジ・ロンドン 保全科学修士課程を修了し、環境コンサルタント会社や小笠原の自然保護員の経験を経て、フリーランスで翻訳業務などに携わる。その後、石川県に拠点を移し、国連大学の調査研究を業務委託で支援し、金沢大学の里山里海マイスター育成プログラムの業務にも従事していた。現在は OUIK の能登の生物文化多様性や世界農業遺産 (GIAHS) 関連業務に研究員として携わっており、連携研究員として珠洲市の能登 SDGs ラボの取組も支援している。

インターン生の紹介



ラチャタウィジン メイタウィー

東京工業大学環境・社会理工学院融合理工学系 4 年
(インターン期間 2019 年 12 月-2020 年 3 月)

OUIK でのインターンとして 3 か月間、私は、1) OUIK での活動、2) 石川と金沢の生物文化の多様性、3) 研究者としてのキャリアパス、について学びました。更に「北陸 SDGs ステークホルダーミーティング 2019」や「SDGs カフェ」にスタッフとして参加することで、都市レベルでの包括的な意思決定について学びました。金沢市民は生物文化多様性を意識しており、それがユネスコの創造都市としての認定にもつながっていると感じました。

OUIK での私の主な貢献としては、1) オンラインアクセスを促進するためにブックレットシリーズを紹介するブログなどを含む OUIK ウェブサイトの新しい外観をデザイン提案、2) 日本庭園研究プロジェクトのビデオプロモーションを作成、の 2 つです。

研究内容から、日本庭園が美的要素だけでなく生態学的サービスを通じて都市に役立つという、生物文化の多様性保護における日本庭園の役割をより深く理解しました。チームミーティングなどにも積極的に参加し、研

究やプロジェクトのプランニング、レポートライティングなどを見て学び、自分自身の研究者としてキャリアパスが明確になりました。私の興味は科学コミュニケーションとコミュニティ研究の間にあるので、両方の興味が現実でどのように出会い、モチベーションが高まっているのかがわかりました。

また、生物文化の多様性に富み、刺激的な人々に囲まれたこの金沢というまちのおかげで自分自身も成長できました。この機会に深く感謝し、同じような興味がある方はこのインターンシップをお勧めします。想像していた以上の学びを得ることができ、私にとって、今後の核となる部分を形成できた 3 か月でした。

読者のみなさまへ

新年度を迎え、色とりどりの花が咲きそろう季節となりました。昨年度中は地域の皆さま、そして様々なパートナーの皆さまのご協力のもと、研究活動を行うことができました。こころより御礼申し上げます。今年度も、石川・金沢における生物文化多様性の保全、そして持続可能な社会作りを目標に職員一同、日々の業務に取り組んでまいります。

さて、新型コロナウイルス感染拡大の影響で石川県においても緊急事態宣言が発令されました。罹患された皆様と、感染拡大により生活に影響を受けている皆様に、心よりお見舞いを申し上げます。

OUIK でも、感染リスクがあることを勘案し 2/29 に東京で予定されていたイベント「日本庭園と SDGs」をはじめ、いくつかのイベントや活動をやむなく延期または中止とさせていただきます。楽しみにして頂いていた皆様には、安心安全のための決定にご理解を頂き、誠にありがとうございました。

今後も引き続き、感染拡大の収束まではイベントやミーティングの開催をオンライン開催へと切り替えていく予定です。詳細はホームページや OUIK の Facebook ページなどでご確認くださいませ。

一刻も早い事態の収束を願いつつ、皆様におかれましてはどうぞご自愛くださいますようお願い申し上げます。

OUIK 職員一同

2020 年 4 月発行

国連大学サステナビリティ高等研究所

いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット

〒920-0962 石川県金沢市広坂 2-1-1

石川県政記念しいのき迎賓館 3 階

Tel: +81-76-224-2266 Fax: +81-76-224-2271

mail: unu-iasouik@unu.edu

URL: www.ouik.unu.edu

